

## シンポジウム報告

# 銭湯はまちづくりに寄与する!

…まちづくりのヒントを探る



日時: 2019年3月8日(金)18:30~20:45

会場: 大阪市立大学 梅田サテライト(大阪駅前第二ビル6階)101号室

パネリスト:

[銭湯とまちづくり実践者] 松本康治(さいろ社代表)、栗生はるか(文京建築会ユース 代表)

[銭湯の経営者] 湊三次郎(サウナの梅湯、都湯)、桂秀明(『自転車湯』千鳥温泉)

参加者: 39名(建築・不動産関係者、大阪市立大学社会人院生ほか)

銭湯とまちづくりに関するリレートークおよびパネルディスカッションを行いました。第一部のリレートークではそれぞれのお立場から銭湯についての活動をご紹介して頂き、第二部のパネルディスカッションでは、巨大なインフラとしての銭湯を起点としてのまちの再構成、「まちづかい」についてご議論頂きました。

## 第一部 リレートーク1

### 「最近のお風呂屋さんの応援活動」 松本康治氏



昨年11月に「旅先銭湯」を発売。「関西の激渋銭湯」「激渋食堂メモ」などのサイトを主催するほか、銭湯ファンの仲間たちと「ふろいこか〜プロジェクト」を立ち上げ、銭湯を勝手に応援している。著書は『レトロ銭湯へようこそ(関西版、東日本版)』ほか

あくまで私は一入浴客である。お風呂屋さんが大好きで、何が面白いのか？何か好きなのか？また一銭湯ファンとして、お風呂屋さんが無くなって行くことについて何ができるのかを話したいなあと思いましたが、この間の土曜話したら1時間20分かかったので、今日はそれを全部端折って、最近やっているお風呂屋さんの応援活動について話します。

淡路島の岩屋にある扇湯さんについて話します。明石海峡大橋があり、サンフランシスコからゴールデンゲートブリッジを眺めながらサウサリートへ行くのと同じポテンシャルを持つまちです。高速道路ができて通過されるようになって寂れて商店街もほとんど「死に体」の状態になった。その中に残っているのが扇屋という銭湯。私が入浴していた時にボイラーが壊れ、廃業の話が出たが、私は「やめたらまちが死んでしまう」と思い、店主と覚え書を交わしたうえで応援を始めました。SNSやビラ撒き、ボランティアが淡路島の物産を仕入れて神戸や大阪で販売し、稼いだお金で備品を買ったり活動費を捻出出来るようになりした。また近くのスーパー銭湯から声を掛けられ、一緒にスタンプラリーをするようになりした。

銭湯は孤独な商売だが私たちが応援するようになって、おかみさんも仲間ができたと喜んでくれるようになりしました。

しかし、まちは寂れて行く...このままゴーストタウンになったら銭湯も先が見えてると思い、淡路島の無農薬のレモンを使った淡路島ハイボールを売り出すことを考えました。廃業した食料品店を借りてハイボールスタンドを定期的に営業するようにしたところ、銭湯の客だけでなく観光客や地元の人が交流する場となりました。

## 第一部 リレートーク2

### 「銭湯活動家として」 湊三次郎氏

何も準備せずにここにきてしまいました。今日も朝、薪を運んで色々して新幹線ぎりぎりここに辿り着きました。銭湯活動家として、京都と滋賀で二軒の銭湯を経営しています。

学生時代は京都外国語大学のブラジル・ポルトガル語学科で学びました。松本さんと一緒に銭湯が無くなりつつあるのを何とかしたいと思い、自分で銭湯をやると言うことが無かったので、自分が中に入ってやってやろうと思っていました。一旦就職しましたが、銭湯のことで何かをしようと思っていたところ、“預かり湯”という大家さんが居ながらも事業者が借りてやる仕組みがあり、仕事を辞めるタイミングをお願いしてやることにしました。前任のとき月20万円の赤字が出ており、立地が悪くなくてとても出来るとは思えなかったが、若気の至りで銭湯経営の最強モデルをつくろうと取り掛かりました。

ただ本当に最初はしんどかったです。一人でやっていたので、薪を取りに行き、湯を沸かして銭湯を開けて、番台して、閉めたあとは掃除をして...ということで、泊まり込みの生活でした。しかし、お客様の求めに応じて色々やっているとお客様が増えて、はじめは一日60人ぐらいだったのが去年は最高で一日245人となりました。入金額も月90万円となってきました。そうしているとやる気が出てきたので、もう一軒を探して大津に物件を見つけました。去年の今頃から準備を進め、11月に開いて今4か月目です。

銭湯の引き出しは沢山ありますので、なんでも答えます。質問とかありましたら...



銭湯業界そのものを盛り上げたいという気持ちから「銭湯活動家」を名乗る。廃業危機の「サウナの梅湯」を引き受け、当時1日平均客数57人だった客数は、現在では190人を超す。2軒目の銭湯「都湯」を復活すべく活動中。梅湯の救世主は、銭湯業界の救世主を目指す。

## 第一部 リレートーク3

### 「風呂屋の苦痛からの逃げ方」 桂 秀明 氏

大阪市此花区の「千鳥温泉」を運営する店主は、脱サラし、担い手がなくなった銭湯を引き継いだ。サイクリストである店主は「将来は自転車乗りが集まる銭湯にしたい」と、将来ビジョンを語る。「淀川サイクリングロード」や実業団レースが開催の「舞洲」にも近く、サイクリストに馴染みの深い場所に位置する。



私は湊さんとは違う風呂屋になると思います。湊さんは銭湯を救って行きたいという思いですが、私は「この銭湯で残りの人生楽しく」と思っています。今日お話しするのは「苦痛からの逃げ方」ということで、どう暮らして行くのかを述べたいと思います。

大学卒業後、映像関係の仕事に就こうとしてリクルート映像に入ったり、旅行が好きだからJTBインターナショナルに入ったりしました。そのうち、松本さん中心でやっておられる「てくてく銭湯」に参加して、風呂屋の近くのおもしろスポットを巡って夕方に銭湯に入るとい町歩きガイドをするのに関りました。此花区のお風呂屋さんに関わるようになってきたときに、“貸し風呂”である千鳥温泉がやる人がいない状況だと聞きました。話を聞きに行っていたら、急に自分が風呂屋になったらオモシロいと思ってやることにし、家族の了解をとり、サラリーマンを辞めて風呂屋になりました。

「風呂屋の苦痛」というと、①休みが少ない、②拘束が長い、③掃除がしんどい、があります。①はサラリーマンでは144日も休みがあったのに、今は週1日と1月2、3日の合計54日。これから儲かるような風呂屋にして人に頼めるようにしたいですが、旅行が出来ないのが辛いです。②拘束時間は当初は朝10時から午前3時と17時間だが、今は14時間位になってきています。この5月から営業時間を30分短くして拘束時間をもっと減らすつもりです。③は風呂屋の2階に部屋があり、それを無料で貸す代わりに営業後の掃除をして貰うようにしており、今は2.5人程度の助けがあります。

苦痛が沢山あるので、面白いことをどんどんやるようにしています。好きなミュージシャンを呼んだり、鏡広告をして無料で鏡を替えてもらったりしています。変わった活動をしている風呂屋だと仲間が集まってきて、手伝ってくれて、まちに人が集まってくれればと思います。

## 第一部 リレートーク4

### 「せんとうとまち」 栗生 はるか 氏

張り切って160枚の写真を持ってきましたが、収まり切らないので現在の活動はパネルディスカッションでご紹介できればと思います。

私は建築が専門で、自分の専門性を地域に役立てようとこの「文京建築会ユース」という有志団体の代表を務めています。地域のことを発信したり、活用提案する活動をしています。初めは東京の文京区に在住・在勤する都市を専門とする社会人、学生でしたが、次第におじさんから留学生まで、まさに銭湯のような多様性のある会になっています。

当初は地域のことを知らなかったので、地域を知る勉強を始め、住民の地域愛を醸成する活動をしていました。そんなときに出会ったのが銭湯です。実際にのれんをくぐってみると深刻な状況にあり、それから戻れなくなりました。東京都では週に1軒か2軒廃業していると言われていて、去年の11月で550軒ほどとなっています。文京区でも最盛期には60軒以上ありましたが、2013年に12軒、今や7軒となり今月も1軒が廃業になります。丁度私たちが関わったころに廃業が続き、私たちはまるで「おくりびと」のようでした。

風情のある良い銭湯が無くなって行くので、こうしちゃいられないと中へ入り込んでいくことになりました。何度も通って店主との信頼関係をつくり、その結果、立会えない場に立ち会うことができるようになりました。建物の詳細な記録を作らせて頂き、細工における日本人の精神性や、ペンキ師さんの伝統技法など多岐に渡る記録をしました。蔵から出た過去の写真も収集したりしました。

また銭湯は様々な人の居場所にもなっています。地方から来た人、留学生などの唯一の受け皿になっているのではとも思います。お泊り保育になっていた銭湯では、成長した子どもが戻ってきます。

銭湯の廃業により、これまで存在してきた“地域の生態系”が解体、崩壊することが分かりました。銭湯がなくなると空き家が増えたり商店がつぶれたり、「銭湯が消えると町一つが無くなる」と言ってよい衝撃があります。

そのような状況で私たちに何が出来るか、せめて色々な記録を取って、痕跡を残せたらと活動しています。また銭湯の見学会、銭湯が廃業する背景を考え、銭湯の廃業を食い止める提案をしています。

2011年に若手建築家や建築を学ぶ学生を中心に結成され、文京区の魅力を発掘し発信する活動を行っているグループ「文京建築会ユース」代表。銭湯を中心に広がる周辺地域までをその魅力として捉え、銭湯が一つなくなることが、地域の歴史や景観、コミュニティに及ぼす影響は甚だしいものと考え、「せんとうとまち」主宰。



## 第二部 パネルディスカッション

### Q1: 銭湯の発展、持続性、災害、後継者問題について



風呂屋は、災害があってもなくても一貫して減っています。後継者問題、周辺人口、場所、サウナの有無などさまざまで、とりあえずは高齢者だけで担っている銭湯が最優先で応援、寄り添わないと、続けていけないと考えます。

そのポイントは3つあります。①モチベーション支援; 常連さんがほとんどで、それがどんどん減っていくだけでは、面白いはずがない。店主さんに一人でやっているんじゃないよと、親身になって色々な応援活動をする事で面白くなり、モチベーションが上がる。②業務支援; 手が届かない場所の掃除など大変なことを手伝ってくれる仲間が居ることが重要。③経済支援(集客); ビラ撒きが基本、SNSも無料で出来ます。撒けば来てくれます。ご高齢の店主さんにはそういうことも無理なので、我々ファンが撒けばよいと思います。

この3つを同時に行う、その応援モチベーションをこっちが持つことが重要と考えます。



銭湯の仕事は本当にしんどいです。ある程度利益が出ているから、スタッフをやとって銭湯を運営して貰い、その穴に自分が入るとかたちをとっています。始めたころは自分一人でしんどくて若かったからできたと考えます。そういう部分で、松本さんがおっしゃったサポートが重要と感じています。

あと銭湯を続けていくと考えたときに、利益が出ているといっても貯まらない。大家さんから借りているが、今後土地も設備も自分で用意して考えると、設備だけでも3~4億円掛かるのに収支は合わない。この先20年30年、銭湯をやって行こうと思ったときに難しい。取り敢えずの悪あがきをやっているようで厳しい状況です。



支援を考えると、自分自身は忙しくて他の風呂屋さんのことまで考えることはできません。ただ私を応援してくれるのであれば、ツイッターなどでの応援、私が言っていることを拡散してくれるとかを手伝ってくれたら嬉しいなあと思っています。



①外からの評価の向上、②内部の経営を安定、この両方が重要だと思っています。①に関して、最近建物を維持するために、宮造りの銭湯を登録有形文化財にと進めています。これは銭湯ってそれほど重要なんだと言うことを、地域の人に知ってもらう意味もあります。宮造りだけではそれ以外の銭湯が抜け落ちることもあるので、ゆくゆくは「銭湯文化」自体を無形文化財として世界遺産登録にでもすべきと思います。それぐらい大事にしないと残らないと思います。銭湯が残れば、連鎖的に地域の色々なものも残り、まちの維持にもつながります。日本だけでなく海外からの支援も考えていて、銭湯があることで地域にどのような影響を及ぼすかを考える段階にあると感じています。銭湯を維持することが地域の価値につながると考えます。

## Q2: 銭湯はまちづくりに寄与するか？



商店街の中に色々な施設があるが、一番金が掛かっているのが銭湯で、地面の中の配管、ポンプ、濾過機、タンクと何千万円もの金が掛かっている割に、おじいさんおばあさんだけでやってたりします。飲食店に比べて、やめるのにも取り壊しに金がかかるし、常連さんもいてやめにくい。だから最後まで残っています。風呂屋が無くなる時がまちが死ぬ時、別のまちにかわってしまうときだと思っています。最後になる前の段階でまちを維持するにはどうするのかを考えないといけないです。いよいよというところで僕らも目が覚めたということになります。



学生時代から全国色々な銭湯にっていて、銭湯がなくなるとガラッとまちが変わると感じています。銭湯に行っていたかは別にして、銭湯があったから存在していた店が無くなったから、まちの流れが崩れるというのがあります。でもそれを銭湯やっている側は感じ取られない、認識できないです。自分の風呂のことで精一杯、そのまち全体のことを考える余裕がない、店のことで必死過ぎて…。でも地域に根差した商売なので、積極的にまちの行事に参加しようとしています。二軒目から近くの高校から美術部の絵を置かしてくれという依頼があったので、取り組んで行こうとしています。



うちの風呂屋で言うと、上にアパートや施設の中に空いている部屋があります、そういうところに手を加えてリノベーションして若者を住めるようにしています。風呂屋を手伝いたいと言う人も増えているので、そのような人に無料で住めるので手伝って欲しいということで若者を集めれば、その友達もと広がって行くのではないかと、まちがそのままの状態若くは若い人が増えていくことになるのではないかと考えたので、リノベーションとか支援してあげれば若者が住み着いて、彼らがまちをつくって行き始めるのではないかと考えます。うちの風呂屋でも空き部屋をきれいに民泊とかしたら面白いと思っています。



私は銭湯そのものが“まちづくり”だと思っています。銭湯が心臓の役割を果たして、そこを出入りする人やモノがまちを活かしているイメージです。ただ、循環する流れがなくなっちゃうと、まちとして生きられなくなってしまうので、銭湯を中心として循環する流れを助長するために様々な提案を考えています。

最近は銭湯だけに収まらないサロンみたいなものを提案しています。松本さんの話にもあったように、銭湯以外のまちの機能を使わせて頂いて、銭湯のフラッグストアとして発信したり、銭湯のコミュニティーサロンを外部にはみださせることで、来場者のハードルが下がり多くの人々が銭湯のコミュニティーに入りやすくなると思います。例えば銭湯が付属屋を資産として持っている場合がありますが、それに手を加えて銭湯の行き帰りのちょっとしたサロンとして活用することで銭湯に来たことのない人も既存のコミュニティーに入るきっかけとなるのではと思います。

そこでの儲けが、先ほどの②内部の経営安定にもつながればよりいいですね。



以下、道後温泉でのまちでの楽しみ、銭湯が意義あることを色々な人に知ってもらうこと、風呂屋でのドリンク、呑み屋さんとの連携などが述べられた。また銭湯を起点に街の再構成の事例を作ることができればとの意見も述べられた。

## 会場からの言葉

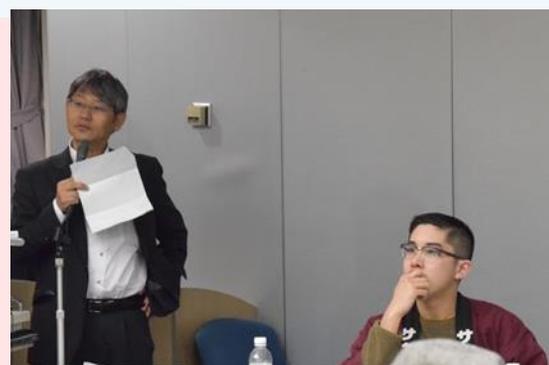
・永田潤子教授(大阪市立大学大学院都市経営研究科・都市政策・地域経済コース担当)

今日の話をお聞きしていて、「まちづくり」ではなく、「まちづかい」の議論かなと思いました。私たちが失って来ている力で「まちを使う力」があります。例えば、商店街がなぜ寂れてきているかという私たちがまちを使わなくなってきたからです。先ほどお話があったように設備投資したものであるにも関わらず私たちがまちの財産を使え切れていない。4人の方々の話を聞きながら、まちをどう使うのかの「まちづかい」の観点から地域にある銭湯の可能性を、もっと使った方が良くと考え、銭湯を含めたまちを使うという能力を私たちはもう少し考えていくことが、銭湯文化、まちを面白くしていくのではと思いました。

・参加者の質問と、パネリストの回答

Q:スーパー銭湯との根本的な違い、銭湯との関係は何かでしょうか？

A:(松本)スーパー銭湯は都心のオフィスに経営者が居て、従業員が通ってくる世界。その一方、銭湯はその店に家族で住んでいて、経営者はまちの顔ともいえる人。スーパー銭湯の中には、銭湯の温かさをなんとか出すためにコミュニティー性を作ろうと従業員に努力させているところもあります。銭湯はその温かさを持っていたが活かしきれていない状況にあります。



A:(湊)休日には、スーパー銭湯に入りに行っていますが、若い人も言っているし、私も正直言うとやっぱり好いと思っています。銭湯は昔からのことがあり、スーパー銭湯のような企業努力が出来ない状態にあります。でも銭湯の人間はもっと他の業界にいて学ぶべきだと思っています。

### まとめ(研究会リーダー 信藤勇一)

第1部では、ゲストそれぞれの立場でリレートークいただき、第2部では、パネルディスカッション「銭湯はまちづくりに寄与する！・・・まちづくりのヒントを探る」をテーマに、銭湯によるまちづくりの可能性を探り、「銭湯とまちとの関係性」について考えることができました。

これまで「銭湯」に関するシンポジウムは、銭湯自体の紹介・存続・活性化をテーマとしたものが多く開催されてきたと思いますが、今回のシンポジウムでは、「銭湯とまちとの関係性」～「まちづくり」～「まちづかい」へ議論が進み、銭湯のまちでの評価・価値を論点として議論することが出来ました。結論、まちには「銭湯」は欠かせない存在であることを確信いたしました。ゲストからは、「銭湯が無くなるとまちが死ぬとき・・・」「銭湯そのものがまちである」「銭湯が無くなるとガラッとまちが変わる」等々との評価も頂き、「銭湯」が強くまちと関係していることも理解出来ました。

今回「銭湯」の魅力を見直し、「銭湯」の発展・持続の可能性とともに、まちとの深い関係性を知るよいシンポジウムとなりましたが、今後も銭湯文化とまちに関わる研究・勉強を続けていきたいと考えております。

最後になりますがシンポジウム開催に際し、ご参加いただいたゲスト各位、参加者各位、開催関係者へ感謝申し上げます。

大阪市立大学大学院 温浴研究会

永田潤子(大阪市立大学大学院 都市経営研究科 教授)

信藤勇一、石田隼也、玖島理与、石秀祥、高原浩之、辻有美子、土野池正義、西野稔  
(大阪市立大学大学院 都市経営研究科生)